

## いま学校現場で学力問題は

センター協力研究員（杉並区立杉並第三小学校教諭） 有 田 八州穂

「学校現場には学力問題は存在しない!？」という『神話』が語られることが多い。それは、二つの意味を持つ。一つは、なんとなくは感じていても、「これといったデータを現場は持ち合わせていない」という意味で。もう一つは学力問題は、「分数ができない大学生」の大学レベルの問題であって、私たちには無関係だという意味で。

はたして、そうだろうか？

現場で、「子どものこのどうしようもない危機」（これは、子どもの責任ではない）に直面してみると、実は『学力問題の本質的な意味』に突き当たる。それは、「現実の子ども」を直視するより、「あるべき姿の子ども」を見たいという教育に関わる大人たちの勝手な願望である。つまり、「これからの教育」（これを「ゆとり教育」と呼ぶか「生きる力」と呼ぶかわからないが）を考えたとき、「学力が低下しているデータはない」と思いたい無意識、「学力低下は私たち小中学校には無関係だ」と思いたい無意識がどうしようもなく働いてしまうのである。かくして、「現実の子ども」ではなく「あるべき子ども」を見たい「新学力観」が生まれる。

現場にとって「新学力観」というのは、子ども達の学力を測るモノサシのすげかえであった。つまり、従来の「学力モノサシの陳腐化」（「これまでの知識の陳腐化」の主張にともなっておこる症状のひとつ）である。

この新モノサシを使うと、この東大の学力プロジェクトが出した衝撃的な学力低下の現実も、「たいした問題ではない」ことになってしまうのだろう。事実、小学校では、新学力観による「観点別評価」の浸透のため、「観察・診断による評価」が主流になり、「数値による評価」が後退し、おそらく、このままいけば、10年後には、「同じ学力調査」そのものが不可能になるだろう。こう考えると、「学力問題」というのは、教育にたずさわる大人たちの、「学力意識の低下」の問題であり、「学力の矮小化」の問題であるという本質が見えてくる。かくして、学力神話の3つめの意味、「新学力観によれば、学校現場には学力低下はない」が出てくる。

はたして、これで現場は安心していいのだろうか？

それでも「事件は、会議室で起きているのではなく、現場で起きている」のである。

そもそも学力というのは、そのときどきの社会に影響されるとはいうものの、「適当なモノサシによって、できるだけ客観的に測られる数量化可能な力」のことではなかったのだろうか。我々現場の人間は、「このモノサシは適当だろうか」「客観的でフェアだろうか」「数量化できるだろうか」という不断の検証をしながら学力をはかってきた。

それが、「生涯に渡って続く学ぶ意欲」が学力の第1に挙げられた結果、「情」が重視され、モノサシが曖昧になってきた。曖昧どころか、「旧来の」モノサシそのものが否定されたのである。

「情」は重要であるが、学力そのものではない。少なくとも「測る」対象ではない。子ども達の学びをみる、大人の重要な視点ではある。それが、このごろあまりにも「情」や「情意」の文脈で子どもの学力が語られることが多い。こうなると、各個人がてんでんばらばらの恣意的なモノサシで、てんでんばらばらな子どもを測ることになる。共通のモノサシがあるわけではないから、基準がわからない。何に向かって努力すればいいのか、子どもも大人もわからない。わからないまま学びは進む。とりたてて「生きる力」が無くても、何となく生きられてしまうこの国の子ども達にとって、「生きる力」の強調は何を意味するだろうか？また、意味しないだろうか？私たち教育現場のものは、臨教審以来こういう「期待されるあるべき像」にふりまわされつづけてきた。しかも、抽象的な。

もうそろそろ「情」に振り回されて、学力を語るのはやめにしたいがどうだろう。もっと、シンプルに誰にもわかる、だれもがフェアであると納得できる「理」の学力論争を教育方法論議とともに行いたい。現場の「古いタイプ」の人間は、そんな「学力論争」を夢みている。